様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０２３２５

研究課題名（和文）舞踊と記録技術―20世紀における身体芸術の再生と再編

研究課題名（英文）Dance and Recording Technology: Replay and Restructure of Performing Arts in 20th Century

研究代表者
岡田　万里子（Okada, Mariko）

桜美林大学・リベラルアーツ学群・准教授

研究者番号：６０２９８１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：記録技術を利用した舞踊実践は、レコード舞踊から始まった。舞踊の記録は、文字資料、絵画資料や舞踊譜が先行し、映画もレコードに先行するが、一般に普及したのはレコードが最初である。レコードにより、地方でも都市部と同じ音楽での舞踊上演が可能となり、楽器を演奏しなくても稽古場をひらくことが可能となった。そのため、稽古場が増え、舞踊が盛んに行われ、戦後の舞踊の興隆に結びついたと考察できる。一方で、レコード舞踊は戦前に嚆矢が認められ、軍国主義的な音楽と舞踊の普及を進めたことも確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
舞踊は、記録の残らない芸術である。あえてそれを記録しようとする行為は、むしろ否定されてきたとも考察できる。しかし、戦後は、個人の利用できる記録メディアが技術発展によって拡大してきた時代である。家庭における舞踊稽古から劇場公演までの多様な場において、また稽古を始めたばかりの初学者から玄人の舞踊家まで、さらに小品から大作まで、あらゆる舞踊の状況に記録再生技術が使われてきた。軽視され否定された舞踊の記録に焦点をあてることで、戦前から戦後の舞踊の変遷を理解し、これを取り巻く社会状況をも明らかにできる。

研究成果の概要（英文）：The first example of dance using recording technology was in connection with phonograph records. Script, visual, dance scores, and films preceded phonograph records, but phonograph records were the first to be widely used by the general public. With the phonograph records, it has become possible to dance to the same music in rural areas as in urban areas, and it has become possible to teach students without playing an instrument. As a result, dance classes and dance performances increased, leading to the prosperity of dance after the war. On the other hand, it can be confirmed that record dance was an invention in the prewar period and they promoted the spread of militaristic music and dance.

研究分野：演劇学

キーワード：舞踊　ダンス　記録技術　レコード　テレビ　日本舞踊　バレエ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　舞踊と記録の関係の総括　研究を開始した2010年代半ばは、まだTikTokもなく、Instagramも日本では浸透していなかった。動画撮影はデジタルビデオカメラによるものが主流で、今日のように手軽にスマートフォンで動画を撮影し、スマートフォン上で編集してインターネットに公開するなど考えられなかったものである。本研究を進めている間に、映像記録の技術はさらに飛躍的に向上し、舞踊と映像記録の関係も大きく変化したといえるだろう。しかし、当時から、スマートフォンのカメラ性能は確実に向上しており、静止画は撮影も配信も可能であった。動画撮影も可能ではあり、個人の動画配信に注目が集まっていた時期でもあった。本研究は、こうした状況を見据え、舞踊と記録の関係について歴史を遡って総括しておくことが必要と考え、企画したものである。

(2)　舞踊記録史の必要性　舞踊は、他の芸術と比較しても、とりわけ記録を困難としてきた。演劇には脚本があり、音楽には楽譜があり、これらが充分ではないとしても、このような断片的な記録ですら残らないのが舞踊だからである。動画記録のない時代の舞踊研究は、芸談や見聞録といった主観的な資料を基盤としながら、評論や番組（プログラム）、日記等、可能な限りの資料をもって補完を試みるものである。舞踊を記録し、身体を介さずに伝承しようという努力は、バロックダンスの舞踊譜や、能・狂言の型付などに見られるが、身体動作の情報量は多く、図像化や言語化を行っても漏れるところは少なくない。近代に入ると写真（静止画）や映画（動画）、さらに近年はマルチアングル（複数の方向からの撮影）やモーションキャプチャーと進化した技術で舞踊の記録は試みられてきた。舞踊の稽古／レッスンにおける動画の活用は今日では当然のものとなってきている。

　こうした舞踊の記録の考察が必要である理由は、これらの記録が舞踊そのものに変化をもたらしたであろうことが推測されるからである。舞踊は、表現すると同時に消えてしまう芸術であるが、記録があることにより、伝承に指導に変化が起きたことは想像に難くない。舞台で発表される芸術作品としての舞踊はもちろんのこと、伝承の場や舞踊をとりまく社会環境について考察をすることが必要と考えられた。

　研究開始時の基礎的な調査結果を報告した研究発表（「舞踊と記録の相互作用」2016年12月4日 第68回舞踊学会大会）では、従来着目されることのなかった舞踊記録に焦点をあてたため、研究代表者らが研究対象とする日本舞踊や西洋舞踊だけでなく、民族舞踊や社交ダンスの研究者らの関心も集めることができた。

２．研究の目的

（1）　本研究の目的は、特に記録に関わる技術が、記録の対象であった舞踊にどのような変化を与えてきたかという問題を提起して調査・考察を行うものである。20世紀の100年間に、視聴覚機器は大きく発展した。家庭用のカメラ（静止画ならびに動画用）や録音再生機材が普及し、舞踊の舞台へも稽古／レッスンの現場へも持ち込まれるようになった。舞踊に伴う音楽の、演奏されるものから再生されるものへの変化は早く行われた。レコードの普及によって伴奏者が不要となり、稽古も舞台も簡便に行えるものと変わった。本研究においては、これまで補助的な存在として重要視されず、研究対象とされてこなかった記録技術に注目し、これらが舞踊の表現や伝承に与えた影響を考察するものである。

３．研究の方法

（1）　舞踊雑誌の記事・広告の調査　『日本舞踊』『邦楽と舞踊』などの舞踊雑誌から、記録に関わる広告を調査し、全体像を明らかにしようとした。舞踊家、稽古者、鑑賞者、評論家等の舞踊に携わる多様な人々を執筆者及び読者と設定している『邦楽と舞踊』がとりわけ有用であり、当初は広告を中心に調査を行ったが、記事にも記録技術に関わるものが多いことから、時期を区切り、1950年から1975年までを重点的に調査した。

（2）　舞踊用レコードの調査　前述の雑誌記事・広告から、当時「レコード舞踊」が広く普及していたことがわかり、レコード会社等が発行した目録及び実物のレコードの調査を行った。非常に多くの事例があり、すべてを目録化することができなかったが、舞踊用レコードの特色を明らかにすることができた。

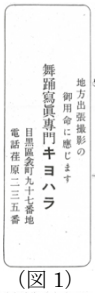
（3）　舞踊家への聞き取り調査　雑誌記事やレコード目録の調査により時系列を整理したうえで、レコードやテープレコーダー、ビデオといった録音録画再生機器の使用について、2017年に当時88歳の舞踊家にインタビューを行った。

（4）　本研究グループは、日本舞踊研究者と西洋舞踊研究者による総合的研究を試みてきており、定期的に研究会を開催し、相互の研究発表内容に関して議論を進めてきた。日本舞踊研究者

らは、資料分析を通じて記録技術が舞踊にもたらした影響を分析し、西洋舞踊研究者らは、民族舞踊や西洋舞踊の来日公演等、対象時期の環境を議論し、また、記録からの復元を検証することで、記録の資料的価値を考察した。

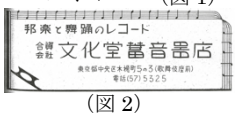
４．研究成果

(1)　雑誌『邦楽と舞踊』の調査　『邦楽と舞踊』は 1950 年に創刊され、創刊号の河竹繁俊「発刊の辞」によれば、戦後の急激な西洋化に対する危機感をもって発刊された日本の「伝統的な」舞踊と音楽の雑誌であるが、西洋的なものを排除しようというものではなく、日本舞踊家がバレエを学ぶ特集（竹内昭一「日本舞踊家のためのバレエ知識」全 4 回、第 2 巻 3〜7 号（1951 年 2〜6 月））や、「アメリカだより」（第 2 巻 4 号）、「ニューヨークの劇場と照明」（第 3 巻 2 号）など、西洋から積極的に学ぶ姿勢が読み取れた。

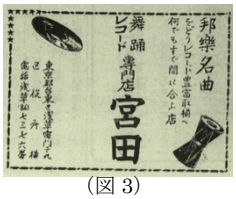


（図 1）

当初調査対象とした広告については、1950 年 4 月発行の創刊号には「舞踊写真専門キヨハラ」（図１）という写真店の広告が唯一の記録に関するもので、そのほかは、衣裳、小道具、楽器などの舞踊関係と、飲食店の広告であったが、1951 年 1 月発行の第 2 巻 2 号より「邦楽と舞踊のレコード」とうたう合資会社文化堂蓄音器店の広告（図 2）が掲載されはじめる。その後、1952 年 1 月発行の第 3 巻 2 号より舞踊レコード専門店宮田（図 3）、同年 6 月発行の第 3 巻 7 号より KKK 録音機（図 4）、1953 年 6 月発行の第 4 巻 6 号より、ビクターやキングといったレコード会社の広告が掲載されるようになる。



（図 2）

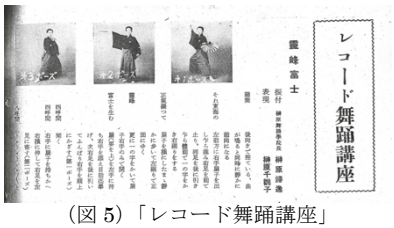


（図 3）

当初は、こうした広告の変遷を調査対象としていたが、記事においても記録技術の影響は多数見られた。まず、1950 年 11 月発行の第 1 巻 7 号より「レコード舞踊講座」という連載が行われている（図 5）。これらは、写真による振りの図解があり、当初は榊原帰逸という民族舞踊の舞踊家によるもので、コロムビアレコードの新譜への振付であるといった旨が記されていた。その後、五条珠実や水木歌紅（初期映画の人気女優栗島すみ子）らが競って「レコード舞踊」を発表するようになる。「レコード舞踊講座」の連載が始まった頃から、公演情報には「レコード舞踊研究会」「レコード舞踊発表会」「レコード舞踊競演会」「レコード舞踏の会」といった、レコード舞踊の公演も多数掲載されるようになる。

（図 4）

1955 年に入ると、「テープレコーダー録音」の引き受け広告が掲載され、「テープレコーダー伴奏舞踊研究会」「テープレコーダー舞踊会」が見られ、テープレコーダーによる録音再生技術の普及していく様子がわかる。これに先立ち、「邦楽ラジオ寸評」「ラジオの邦楽」などラジオに関する記事が掲載されていたが、テレビ放送が 1953 年に始まると、同年には「テレビのための舞踊が出現してもよい」とする「テレビ舞踊」（第 4 巻 4 号）という記事も掲載され、「芸能時評」にも「テレビ」（第 4 巻 6 号）が加わっている。さらに「テレビと日本舞踊」（第 5 巻 12 号）、「テレビの日本舞踊」（第 6 巻 3 号）「座談会「日舞をテレビに進出させるには」」（第 6 巻 4 号）と、新しいメディアの始まりに期待を寄せる記事が掲載される。舞踊は後述するようにテレビと親和性が高く、5 年後の 1958 年になると「テレビ舞踊展望」（第 9 巻 4 号〜）といった記事が掲載され、「テレビ舞踊」が定着した様子を知ることができる。

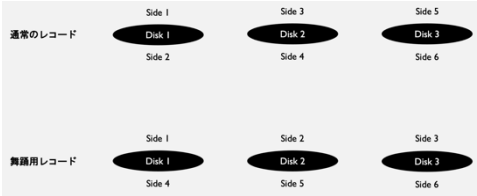


（図 5）「レコード舞踊講座」

雑誌『邦楽と舞踊』は、2011 年に休刊するまで 60 年以上発行されたが、当初から多くの記録に関する広告や記事が確認されたため、1950 年の創刊から 1975 年までを一区切りとした。これらを総括すると、現在から推測できる新しい技術への忌避は評論家や一部舞踊家の記事中に散見されたものの、実際は記録技術が瞬く間に舞踊界に浸透していった様子を確認できた。今日でもテープなどの音源を使用した舞踊会は催されているが、それをことさら言い立てることはなく、「本来なら演奏者に出演依頼するべきところ簡略化している」という認識で行われている。当時、「レコード舞踊会」「テープレコーダー舞踊会」などと称しているところを見ると、むしろ新しい技術を利用していることを誇っている様子が明らかであり、事例の多さから急速に普及したことが確認できる。

(2)　舞踊用レコードの調査　舞踊用のレコードは、前述のコロムビア、ビクター、キング以外にも、複数のレコード会社が多数発売していたことが、各社の目録等から明らかになった。これは、研究代表者らの予測を上回る量であり、悉皆調査をすることはできなかったが、「レコード舞踊」が日本全国で流行し、舞踊用のレコードの需要が高かったことが裏付けられた。同時に、1960 年代までの日本舞踊を知る舞踊関係者に尋ねると、大多数が「レコード舞踊」の存在を知っており、レコードを用いて舞踊の稽古や発表会を行っていたと述べた。しかし、あまりに通常

のことであったようで、とりたててレコード舞踊に対する記憶を聞き取ることは難しかった。
　邦楽のレコードのなかでも、「舞踊用」「おどり用」として売られたレコードは、消耗品扱いであったか、鑑賞用の邦楽レコードとは区別されていたようであった。しかし、これら舞踊用のレコードには顕著な特色があった。昭和 30 年代まで生産されていた SP レコードは、片面 3 分程度しか収録できなかったが、日本舞踊曲は、短いものでも十数分、長ければ 1 時間程度のものであるため、SP レコードでは複数の面に分割して全曲を収録した。通常の鑑賞用レコードは、第 1 面の裏が第 2 面となっており、第 1 面を聞いた後で続きを聞きたい場合は盤を返して第 2 面を掛けなければならない。当然ながら、第 1 面から第 2 面の間に、小休止せざるをえない。しかし、舞踊を上演／稽古する際に音楽が途切れると舞踊も中断されるため、継続してレコードを掛ける工夫が必要であった。右の（図 6）のように、たとえば 3 枚組のレコードの場合、第 1 面の裏が第 4 面となっており、第 2 面の裏が第 5 面、第 3 面の裏が第 6 面となる。つまり、この工夫により、2 台の再生機を使用すれば、音楽を続けて再生することができた。



（図 6）舞踊用レコードの特色

　舞踊用のレコードは、SP レコードの生産が終わった後も、EP や LP に引き継がれた。しかし、前述の『邦楽と舞踊』の記事にみられたように、テープレコーダーの発売以降は、テープレコーダーが普及したようである。テープは長時間の録音と再生が可能であり、その上、レコードよりも扱いが簡便であったためと考えられる。
　また、レコードの目録からは、「レコード舞踊」がすでに戦前からレコードと舞踊を結びつけて、日本全国へ普及させようと発売されていたものと確認できた。『邦楽と舞踊』の記事や広告からだけでは、戦後の舞踊ブームに乗じて制作されたもののように考えられたが、写真図解による同種のレコードは戦前にも制作されていた。戦前の舞踊用レコードは、いわゆる伝統的な日本舞踊ではなく、新舞踊や児童舞踊の例が多かったが、日本舞踊の「レコード舞踊」前史としては、軍国主義的な歌謡に舞踊を振り付け、子どもたちに踊らせようとしていた国策をあげなければならない。これらも重要なテーマであるので、あらためて考察対象としたい。

(3)　舞踊家への聞き取り調査　1929 年生まれの藤間流の舞踊家に、日本舞踊の稽古等における機器の使用について聞き取り調査を行った。この舞踊家は、三味線も修得していたため、三味線を弾きながら舞踊の稽古をつけることができたが、それが可能な最後の世代であると本人が述べた。この舞踊家と同世代でも、他流の舞踊家は戦後の稽古場でレコードを使用していたという。
　レコード会社とタイアップした「レコード舞踊」に対して、この舞踊家は否定的であったが、地方出身者の方がレコードとの親和性が高かったという証言を得た。レコードの恩恵を受けたのは、邦楽演奏家が多く存在する都市部よりも、むしろ地方の舞踊界だったというのである。また、機器の推移に関しても、現場の感覚としては、SP レコードからオープンリールのテープ、さらにカセットテープという順で便利になっていったというものであった。しかし、レコードに関しては、軍国主義下の「愛馬進軍歌」などのイメージが強く、好ましくないという感触を述べていた。さらに、こうしたレコード舞踊は、都新聞（現東京新聞）主催の「舞踊コンクール」（現「全国舞踊コンクール」）の課題曲となったことで普及したと教えられた。
　この聞き取り調査を経て、レコード目録から確認できた戦前のレコード舞踊と戦後のレコード舞踊が深く関連しており、同時代の舞踊家の感覚としても切り離せないこと、また戦前のレコード舞踊が、コンクールや懸賞を利用して、全国的に普及したことなどが明らかになった。新しいレコード舞踊に取り組んだのが、日本舞踊のなかでも「新舞踊」と称した舞踊家たちによるものであったことも確認できた。

(4)　初期テレビ放送における舞踊番組　初期テレビ番組表を調査したところ、舞踊番組が多数放映されていたことを確認できた。1952 年の実験放送時から、「スペイン舞踊」（1952 年 6 月 27 日）、「小唄による舞踊組曲「廻り燈籠」」（同年 8 月 23 日）、「日本舞踊「秋まつり」」（1952 年 9 月 16 日）など 13 種が確認され、本放送が開始された 1953 年 2 月 1 日以降も 2 月だけで 7 番組が確認できる。つまり、動く映像を求めていた初期のテレビに、舞踊は適当な素材だったのではないだろうか。こうした番組の出演者は、(3) 舞踊家への聞き取り調査で言及された新舞踊の担い手によるものが多いことも確認できた。
　1960 年前後の舞踊は、1950 年代の勤労者音楽協議会（労音）結成や、1957 年のボリショイ・バレエ初来日公演への社会的注目、1960 年の国際舞踊研修所設立、1962 年の日本民族舞踊団発足などから、勤労者を中心とした一般市民の芸術として享受されるようになった。テレビやラジオの舞踊の放送は、こうした芸術の大衆化に大きく貢献したと考えられる。また、テレビの歌謡番組におけるバックダンサーとしてダンスの需要が高まったことも、看過できない要素である。

(5)　稽古場／レッスンの変容　当初から記録再生技術の進化は舞踊の稽古／レッスンを大きく変えたのではないかと推測してきたが、単に振りや音楽を記憶する補助としての役割だけでなく、稽古場やレッスンのあり方そのものを変化させてきたことがわかった。録音再生技術により、

空間さえあれば、演奏家がいなくても舞踊教師となり、舞踊を教授することができ、発表会を開催することも簡便になったと考察できる。日本舞踊もバレエも指導者である舞踊教師は、女性の職業として確立され、女性の社会進出や地位向上とも大きく関わってきたと論じることができる。

(6)　新舞踊運動の促進　日本舞踊が歌舞伎から独立して独自のジャンルを築いたのは、坪内逍遙の新楽劇論に端を発した新舞踊運動によるものだと考えられている。事実、坪内逍遙の提唱に呼応した舞踊家が、歌舞伎の伝統から離れた新作を披露し、歌舞伎役者ではない舞踊家が誕生したのである。彼らは、歌舞伎舞踊ではない「新舞踊」をかかげたが、彼らを後押ししたのもまた記録技術であったと考察することができる。

　レコード舞踊の担い手として、新舞踊を標榜した舞踊家が活躍したことは前述のとおりだが、彼らの舞台写真は舞踊雑誌だけでなく、婦人雑誌の口絵も飾り、大きなブームを作っていた。先に女性の社会進出と述べたが、映画が始まり、女優が誕生する一方で、女性の舞踊家たちも大きく注目を集めていたことが確認できた。こうした一般の支持が、新舞踊家の活動を支え、日本舞踊を戦後の興隆へ導いたものと考えられる。

(7)　舞踊流派を超えた創作活動への貢献　日本舞踊の重要な特色として、多数の流派に分かれ、それぞれに家元制度を維持していることがあげられる。もともと、歌舞伎の舞台で上演された古典作品は、複数の流派に伝承されているものもあるが、流派に固有の演目もある。特に、近代以降の新作の邦楽作品については、最初に振り付けた流派への遠慮があり、他流が別の振り付けをすることは忌避されてきたと考えられる。しかし、渥美清太郎作詞、常磐津幹五郎作曲の「神楽娘」の例を考察すると、レコードとして発売されたことにより、誰でも音源を入手することが可能になり、流派を超えて普及するようになったと考察された。これも、記録技術の恩恵のひとつで、流派が切磋琢磨できることで、日本舞踊全体が隆盛に向かったと考えられる。

(8)　記録の検証　1968 年に設立された東京シティ・バレエ団発起人の 1 人であるバレエダンサー兼振付家の石田種生は、自らの振り付けを振付ノートとして関連資料とともに残してきた。映像資料が残されているものもあり、これらの記録にどの程度再現可能性があるかという問題を検討した。映像記録が残されていても、特に群舞のバレエは、全体を撮影して記録することが難しく、記録の欠損する部分が残ってしまう。これを埋めるのが記憶の作業であるという。石田の教えを直接受けたバレエダンサーが復元に関わっているケースでは、本人の記憶により復元が可能であったという。むろん、映像記録が残されていない場合は、さらに困難を極めるが、映像記録であってもそれは完全ではないということ、それを補う情報が復元には欠かせないことが確認された。

(9)　総括　本研究課題においては、以上のように舞踊の記録に焦点をあて、基本的な資料の調査から、経験者への聞き取り調査、日本舞踊・西洋舞踊の比較研究を通して、この課題に関連する多様な問題を考察してきた。冒頭にも述べたように、本研究期間には、さらに記録技術が発展し、また、新型コロナウィルス感染拡大による影響もあって、動画配信が著しく増加した。動画 SNS による、短時間のダンス動画の需要も拡大し、技術の偏重も指摘できる。もはや、舞台で鑑賞する舞踊は一部でしかない状況といえる。このような今日の舞踊に関する変化を考察するためにも、歴史的研究は重要であり、特に従来看過されてきた記録技術の影響は必須の研究課題であった。本研究課題においては、基礎的な部分での成果をあげることができたので、今後は記録技術導入過程の詳細な検討をはじめ、本研究課題遂行中に明らかとなった応用的な課題に取り組む必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 稲田 奈緒美	４．巻 1
２．論文標題 バレエの振付記録方と再現に関する一考察　～石田種生の創作バレエ『お夏清十郎』の復元プロジェクトを通じて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 桜美林大学研究紀要　人文学研究	６．最初と最後の頁 198-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 阿部 さとみ	４．巻 8
２．論文標題 宝塚歌劇の日本物舞踊（序論）：総踊りから群舞へ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 パラゴーネ（青山学院大学比較芸術学科比較芸術学会）	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲田 奈緒美	４．巻 11
２．論文標題 日本におけるコミュニティダンスの導入と展開	５．発行年 2020年
３．雑誌名 桜美林論考．人文研究	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 稲田奈緒美	４．巻 10
２．論文標題 英国におけるコミュニティダンスの発展と現状	５．発行年 2019年
３．雑誌名 桜美林論考 人文研究	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　5件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 Mariko Okada
２．発表標題 Record Dance in Japan: First encounter between dance and audio technology
３．学会等名 International Federation for Theater Research（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿部さとみ、岡田万里子
２．発表標題 日本舞踊創造の現状 －風土論の影響と類型化－
３．学会等名 2019 年度日本演劇学会 研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 稲田奈緒美
２．発表標題 石田種生のバレエ振付にみられる“風土”の表現
３．学会等名 2019 年度日本演劇学会 研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿部さとみ
２．発表標題 小林一三の舞踊創作をめぐって
３．学会等名 2019年歌舞伎学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田万里子
２．発表標題 新舞踊運動における他者性
３．学会等名 舞踊学会第23回定例研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田万里子
２．発表標題 The Power of Outsiders: A Dance Movement in Japan Driven by Marginal Women
３．学会等名 International Federation for Theater Research（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 稲田奈緒美
２．発表標題 A reversal of cultural recognition: The ballet choreography of Ishida Taneo and Japanese dance culture in the 1960s
３．学会等名 International Federation for Theater Research（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 阿部さとみ
２．発表標題 Villains Become Heroes: Reversed Narratives in the Dance of Conquest
３．学会等名 International Federation for Theater Research（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田万里子
２．発表標題 Cheerful Disguise of Japanese Militarism: Geisha's Performances in the 1930’s.
３．学会等名 Center for Japanese Studies Noon Lecture Series（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田万里子
２．発表標題 伝承の場としての祇園
３．学会等名 京都産業大学大学院京都文化学研究科開設記念シンポジウム「祇園に生きる－花街の文化ー」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 稲田奈緒美
２．発表標題 動きを記録する舞踊譜、動きを喚起する舞踏譜
３．学会等名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科学術Weeks2018「土方巽の舞踏譜：舞踏家・正朔による実践と舞踊研究の交点を探るワークショップ」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mariko Okada
２．発表標題 Performing Nation: Geisha Dance Performance under Japanese Militarism in the 1930’s
３．学会等名 Dancing East Asia: Conference and Exhibition, （招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡田万里子・稲田奈緒美・阿部さとみ
２．発表標題 舞踊と記録の相互作用
３．学会等名 第68回舞踊学会大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Mariko Okada
２．発表標題 “Traditionalizing Preservation: Protection of Intangible Cultural Properties in Japan.”
３．学会等名 Center for Japanese Studies Noon Lecture Series（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Naomi Inata
２．発表標題 Recreations Repeated: Integration between Japanese classical dance and ballet
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satomi Abe
２．発表標題 Tradition Renewed: Japanese elements in new works of Japanese Classical Dance
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mariko Okada
２．発表標題 From Innovative to Traditional: Inventive Attempts in Changing Traditional Japanese Dance
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Mezur, Katherine, and Wilcox, Emily, eds.	４．発行年 2020年
２．出版社 University of Michigan Press	５．総ページ数 355
３．書名 Corporeal Politics: Dancing East Asia (Studies in Dance: Theories and Practices)	

１．著者名 Baird, Bruce, and Rosemary Candelario, eds.	４．発行年 2018年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 588
３．書名 The Routledge Companion to Butoh Performance (Routledge Companions)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	稲田　奈緒美 (Inata Naomi) (70367100)	桜美林大学・芸術・文化学系・准教授 (32605)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阿部　さとみ (Abe Satomi) (10811466)	武蔵野音楽大学・音楽学部・講師 (32679)	
研究分担者	平舘　ゆう (Tairadate Yu) (40736518)	桜美林大学・芸術文化学群・助手 (32605)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関